

はじめに

本書は、日本の歴史が大きく転換したとされている南北朝時代前後の国家・権力や社会等を「動乱と王権」と題して論じたものである。南北朝期の争いについては、南北朝内乱という呼び方もあるが、ここでは「動乱」とした。私は現在まで南北朝時代の研究において、「内乱」という語句はあまり使用していない。その理由は、「内乱」という語感以南朝と北朝の争い、あるいは「宮方」と「武家」の抗争というような、党派の争いを中心とする意味が感じられるからである。ところが「動乱」という言葉はもつと深みがあり、その時代に生きていた人々すべてを巻き込み、すべての人々がさまざまな抗争に対処し、新しい時代を模索していたことを示す用語とみなされるからである。このことは「戦国内乱」といわずに、「戦国動乱」ということに通ずるものである。事実、南北朝時代は日本の歴史を前後にわけるとの大きな転換が起こったのである。

「王権」にも触れておこう。この語句も私はしばしば使用してきた。「王権」などという用語より、「政権」あるいは「権力」とした方が分かりやすいのではないかとの説も存在している。しかし中

世の国家を支配していく上では、「権力」というような実力だけで支配することは不可能であった。国家を支配するためには聖性を持ち、身分制・儀礼の中心・中核となるような属性を具え、人々の行為を正当化させる観念的権威等を具備していることが必要であり、そのような権威は聖性・身分制・儀礼等の中から生まれてくるのである。「王権」とは「権力」だけではなく、聖性・身分制等を含む観念的権威を合わせ持つものであると認識している。それゆえ本書においては、動乱の社会の中で王権はどのような存在であったのかを追究しようとしたものである。

私は、古代の荘園制(奴隸制)から中世封建制に発展したのは「領主制(農奴制)」が成立し、発展したことによる(「領主制理論」とする、「領主制」による歴史発展を重視する戦後歴史学の最後のころに研究を始めたと思っている。学部学生や大学院生の時代には、領主制の研究は行き詰まっていたが、まだ「地頭領主制」、「国人領主制」、「守護領国制」がさかんに研究されており、さらに「人民闘争研究(一揆・悪党の研究)」も注目を集めていた。私も当然このような潮流に影響されて、千葉氏にかかわる守護の問題、それを発展させて鎌倉府について雑な検討を試みたりしていた。

だが、私が「領主制」とやや距離をおいて国家論や権力論に手を染め始めたのは大学院博士課程のころからである。これ以前、『岩波講座日本歴史』(一九六三年)に載せられていた二本の論文に刺激を受けたからである。一本は黒田俊雄氏の「中世の国家と天皇」であり、「権門体制論」と呼ばれる有名なものである。もう一本は佐藤進一氏の「室町幕府論」である。佐藤氏の論文は私のような権力論に興味を持ちはじめた初心者にとつて大変に魅力的な論文であった。私は最初、黒田氏

の論説には批判的であった。そして成したのが、「応永初期における王朝勢力の動向―伝奏を中心に―」（『日本歴史』三〇七号、一九七三年）であり、室町期、特に義満時代の公武関係を伝奏を通して考えたものである。ここでは黒田論文については批判的であるが、後に黒田氏の「国家や天皇」についての見解を肯定的にみなすようになっていった。いずれにしても、私が「国家や王権」について考えるようになったのは伝奏の研究から発展したものである。

次に私が南北朝期の社会や文化などの研究に深くかかわるようになっていったのは、網野善彦氏の研究を批判的に検討しようとしたことから始まった。最初のきっかけとなったのは『講座日本歴史』第四卷（東京大学出版会、一九八五年）所収「南北朝動乱期の社会と思想」と題する論文である。これより以前から、「領主制理論」の行き詰まりにより、これとは異なるまったく新しい角度から中世史に大きな影響を与える研究が登場してきていた。その主役となったのが網野善彦氏であった。その研究は社会史とか民衆史といわれるものである。彼は南北朝時代を「日本前近代の歴史を前後に分かつ時期」とするとし、未開から文明への移行期であるとしていた。そしてさまざまな非農業民の研究、彼らの天皇とのかかわり、身分論、都市論などの多様な方面の問題を提起していた。最初は網野氏の研究に批判的であったが、この論文を出発点として文学作品、謡曲、寺社縁起などの検討を通して、中世の社会意識、民衆文化、芸能、身分や差別等について関心を持つようになり、網野氏の理論に影響を受けたような形で研究を進めていった。そして次第に天皇の持つ観念的権威というようなものに接近していった。天皇の観念的権威などという側面の研究を進めた結果、

私の研究の位置づけは、従来から存在している武家中心の国家論、権力論とは少し離れた立場となつていったことも事実である。

一九七〇年ごろから、二〇〇〇年代の初頭にかけての中世史研究の中での激しい時代像の変化を見据え、南北朝期前後の「動乱」「王権」の研究にかかわつてきたものから、現代の研究動向をみると、このころの学界を牽引してきた論客・有力研究者等が死去した後、中世史研究を大きく転換させる学説や時代像の転換はまだ登場していないようにみられる。だが、この間、災害史や災害関係の古文書保存、その研究成果、環境史の発展等の新しい分野の提起をはじめとして、新しい視角にもとづいての非農民論、百姓論・都市論・身分制の研究、天皇制や王権論、地域史研究、対外関係論等の論文が着実に積み重ねられている。また、網野氏の研究を再検討して新しい研究方向を見出そうとしたり、従来の常識的な歴史像を離れて歴史を考えようとする研究者も現われ始めている。このような点を思えば、近い将来必ず中世史研究におおきな転換が起こり、新しい日本中世の歴史像が生み出されるものと確信している。

以上は本書をなそうとした背景を叙述したものである。本書は前述のような意識から、今後の研究の一助になればと、かつて執筆した南北朝動乱前後の時代にかかわる学会等の講演、評論、通史などの論考を一書にした。これらのものに序章的なものとして、鎌倉後半期から建武政権にいたる権力形態について触れた文を付け加えた。本書の構成はおおきく、「Ⅰ 王家と武人政権―権威・権力・聖性―」、「Ⅱ コキマゼの文化と社会」、そして「付論」に区分した。